



TITLE:

静脩 Vol. 1 No. 1 (1964.9) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 1 No. 1 (1964.9) [全文]. 静脩 1964, 1(1)

ISSUE DATE:

1964-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65903>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静修

1964年 9月

Vol. 1, No. 1

## 創刊のことば

図書館は図書館利用者のために在る。大学図書館は主として研究者と学生のためにある。京大図書館は、部局図書室を含めて、220万に余る蔵書数を誇り、多数の貴重な文献・資料や特殊文庫の所蔵でその名を謳われている。けれども反面に、この蔵書のための図書館に墮する傾向がなかつたか。蔵書のための図書館から利用者のための図書館へ、ここに大学図書館近代化の基本的な問題がある。

この問題の解決には利用者側の理解と協力が絶対に必要である。例を指定書にとつて見ても、これは教官の学生に対する学習指導上の事柄であつて、図書館はそれに協力する立場にある。一般に文献・資料を蒐集整理し、情報活動を活潑にして、積極的に利用者に奉仕する態勢を整えることは図書館の仕事であるが、この仕事は、個々の教官、各教室、各部局の理解と協力を得て、はじめて完全なものになる。

京大図書館報「静修」の刊行を企てたのは、単なるPRのためではない。図書館と利用者とのコミュニケーションの道をひろげ、もって大学図書館近代化問題の解決に資しようとするにある。希わくは利用者各位の御協力と御支援を賜わらんことを。

(付属図書館長 堀江保蔵)

## 私 事

吉 川 幸 次 郎

私も学問をするものであり、学者のはしくれであるからには、多少の書物を、個人の蔵書としてもっている。30何年前、ベキンに留学生としていた昭和のはじめは、浜口内閣の時代であり、その政策のせいであるのかどうか、また当時の国際経済情勢がどういう風の原因として働いたか、すべて知らないが、私ども留学生にとってあり難いことは、月額日本金200円の留学費が、当時銀だけであつたむこうの金に直すと、2倍以上の5百何十元かになることであった。今の金ならば、20万円ぐらいであろうか。少くとも、3年の留学

をおえてベキンを引きあげた昭和6年の春ごろはそうであり、何でも有史以来の銀の暴落ということであった。唐さんという中国人の家に寄宿していた私の生活費などは問題でなく、おかげで存分に本が買えた。聴講生として通っていた北京大学の講義がすむと、ほかに行くところもないので、古本屋を回った。最大の書店街の琉璃廠では来薰閣、もう一つの書店街の隆福寺では文奎堂が、もっともなじみであった。夕方まですわりこみ、晩めしの御馳走になることもあった。留学費は3カ月分まとめて来る。今の金で5,60万円がとどく。手もとにおいておいてもしょうがないので、ある晩めしのおり、来薰閣の主人陳済川に、君にあずけておこうかという、彼は顔をかがやかせて感謝し、いくら利息をさしあげましょと、真顔できいた。利息はいらない、よい本が出たら、さきに知らせてくれという、一そう感謝された。しかし後学のため、ここの利息はいくらぐらいかときくと、銀行は貸してくれず、町の金融業者からだ、毎月1分2と答えた。1分2という中国語が1割2分を意味するとすれば、大へんな高利だと、感心した。そうしたわけで、ベキン留学中の私は、俄か分限であった。こちらから本屋へ出かけるばかりでない。朝おきると、本屋の番頭が門番の部屋で待っている。多いときは5軒10軒、私はつぎつぎに引見し、藍色のフロンキをひろげさせる。ねぎらないのを原則とし、初めての本屋にはそのことを説明して、正直なねだんをいわせる。帰国するときには、途中、江南を回ったが、その旅費としてまた500円もらった。買いためた本を郵便小包何百包かにして日本へ送るのに200円かかったが、あとの大部分は、さいごの購書の資金となった。そうしてもって帰った本が、今の私の蔵書の中心となっている。ただし戦後、大分売りもした。しかし蔵書の半分以上は、やはりその時の本である。なお事のついでに書いておけば、私に留学費を下さったのは、上野さんという京都の実業家が、主として中国学のためにと、京都大学に10万円を寄付された金の利子であると聞いた。私ばかりでなく、現在中堅の学者である何人かが、この金で中国へ留学した。今はどうなっているかと、いつか学生課へ聞きにゆくと、基金はたしかに保管しています。ただしみな南満州鉄道の株券です。もう一度値が出たら、お役に立てましょとの話であった。

そうしたことで、またその後はあまり本を買う能力がないが、それにしてもやはりぼつぼつと買った本、また人さまからももらった本が、ちょうど本の脊にいつのまにかたまるほこりのように、たまりたまて、私の蔵書はある量になる。ところで私は近ごろそれに厄介を感じている。個人の蔵書のもつ制約を、しみじみと感じている。ほしい本が存分に買えないという制約ばかりではない。整理の制約である。せまい書庫に乱雑にはうり込んだもの、ことに零細なものは、どこにどうおいたか、それをさがすのに、半月つぶすことがないではない。けっきょく自分ももっていることはたしかなのに、図書館から借りること、またしばしばである。図書館ならば、カードをくれれば、すぐ借れる。

つまらない私事を書いて来たのは、何でもよいからという館長堀江さんの依頼の言葉に甘えたからでもある。文学部紀要のための執筆に、この夏休みはあけてくれ、この原稿のための余裕をもちにくかったためでもある。しかし実は、個人の蔵書のもつ制約を語り、それと対比してもつ公共図書館の便利さ、それを強調したかったからであった。残念ながら強調するための時間はなくなり、紙数もおそらくはない。強調は館の関係者にまかせるとしよう。(文学部教授)

### —— 学生との図書館懇談会開く ——

図書館が大学にとって不可欠な施設であることはいうまでもないところで、これの改善・充実については常にいろいろと努力

されてきた。図書館利用者のうち最も大きな比率を占める学生諸君の意見や希望を聞いて、これを改善策の参考にしたいという

ことは、従来からたびたび話題になりながらその機会を得なかったが、はじめての懇談会を6月12日（金）図書館会議室において開催した。

図書館としては最初の試みであり、期待は大きかったが、学生側としても初めてのことでためらいの気持があったためか、参加者は法学部4回生3名、同3回生1名、同1回生1名、文学部4回生1名、理学部1回生1名の7名であった。

まず館長より「近年大学図書館の近代化ということがしきりに叫ばれているが、当図書館においてもそのひとつとして指定図書制度および参考室の充実をはかりたいと思っている。また「図書館報」を発行、学生とのコミュニケーションをよくする手段のひとつにしたいと考えております。今日のあつまりも、そういった構想のもとにひらいたので、遠慮なくご感想や要望を述べていただきたい」と挨拶があり、図書館側出席職員の紹介をおこなって後、出席学生に自己紹介とともに各自の意見を述べてもらうことにした。

学生A—この頃閲覧室が大へん騒がしく、落付いて勉強できません。開架室ができたのはよいが、閲覧室がせまくなったのは困ります。試験シーズンはもちろんのこと平常も満員のことが多く、閲覧室の拡張の意味からも増築を考えてほしい。冬季の暖房設備が不十分で、ストーブから少しはなれると、もう寒くて勉強しておれません。

学生B—自分は座席だけ利用することが多いが、閉館時間をもう少し延長していただけないか。夕食をすませてちょっと休養して図書館にくる。さてこれからという頃、はや閉館のベルが鳴るので困ります。またときどき閉館時間にまだ間があるのに、ベルが長々と鳴ることがありますが気をつけてほしい。

学生C—閲覧室の照明が大へん暗いよう

にと思いますが、図書館として照明度を計られたことがあるでしょうか。図書館の図書費というのは一体どれくらいですか。またこの図書館には宗教新聞や政党新聞、たとえば創価学会の聖教新聞や共産党のアカハタはとらないのですか。

学生D—カード室の目録が大へんひきにくいので検索の仕方をくわしく掲示してほしい。開架室の図書を借りて、さらに書庫の本を閲覧する時、またはその逆の場合でも、先に借りた図書のために学生票が預けてあるため、あとで借りる時は、わざわざ先に借りた方から証明書をもらわないと借りられないのは不便です。

学生E—僕も閲覧室の照明が大へん暗いと思います。是非なんとかしていただかないと目が悪くなりそうです。また閲覧室が本当にやかましいです。静かになるようはり紙でもして下さい。それから、法・経済学部に閲覧室がないので、両学部の本を閲覧したい場合、図書館から借りてもらって読むことになっていますが、その手続きが大へん手間どりますので、もっと簡単に読める方法を考えて下さい。開架室ができたのは便利ですが、とても狭苦しいのもっとひろげて頂きたい。それに3階の増築という問題があるとかきいていますがどうですか。

学生F—この図書館は中央図書館といわれていますが、自分としてはこの図書館の性格がはっきりわからないのです。自分の場合は学部図書がありますから、結構それで間にありますが、この図書館がこういった図書に重点をおいて集めているかという性格がわからないだけに、使いにくい気がします。それになれていないから目録カードも大へんひきにくいです。

学生G—カードがひきにくいのは僕も同感です。それに貸出しのできる本は古いのばかりで、新しいのは開架室にでいて貸出しできませんが、図書を購入する時、開

架室用と貸出用と2冊買うというぐあいにしていただけませんか。また開架室の図書の排列が大分乱れているように思います。次に、開架室ができてから閲覧事務室が5時で閉室されるため、書庫から出してもらった図書は5時までに返納しなければならぬのは大へん不便です。閲覧室は8時まで開いているのですから、書庫から出してもらった本も5時以後は開架室のカウンターに返却すればよいというようにしていただければ助かりますが。雑誌が製本に出されると、今度閲覧できるようになるまで相当の期間がかかりますが、試験期のことも考えて製本してほしい。それに図書館の近代化ということですが、専門の相談係りがほしいです。

以上のように学生から大変活潑な意見や要望が述べられたのに対し

館長—まず図書の購入費ということですが、図書館の予算と学部予算について申しますと、昨年度の図書館の図書の購入費は約450万円で、それに対したとえば経済学部の図書の購入費は約800万円なのです。大学予算というものは大体1講座当りにいくら、それに講座数をかけ、さらに学生経費等をプラスし、それから共通経費をさしひいたものがその学部の予算となります。そのうちある程度が研究図書費ならびに学生用図書費になるのです。しかし図書館には講座や学生経費等そういったものはありませんので、図書の購入費については、学部からみれば非常に苦しい立場にあるのです。

つぎに読書相談については参考掛がありますが、十分な活動はできていません。外国では各専門の図書館員がいて相談に応じていますが、現在の日本ではまだまだそこまではできません。また閲覧室の照明のことで大へんきびしいご意見が出ていましたが、図書館としては照明度を計ったことはあります。しかしそれから大分時期がたっ

ておりますので早速善処いたします。それから夜間の閉館時間の延長ですが、これはすぐにはよいお返事はできません。といいますのは人員の枠があるので夜間の専任者がおけないため、職員が交代で居残り勤務してまかなっておりますので、職員の健康管理の上からも今のところご期待にはそえません。

整理課長—図書館の性格論について大へん痛いご意見がでしたが、研究用の専門図書は各学部で購入しますので、図書館では学生が4年の過程を終えるに必要な参考図書や教養的な図書を購入するように心がけております。つぎに政党新聞や宗教新聞についてですが、図書館という立場から思想的に、また宗教的にかたよることはできませんので、購入はしておりません。

閲覧貸付掛長—開架室の図書の排列が乱れているというお話ですが、掛のものは常に気をつけてはおります。何分にも数が多いのでなかなか思うようにはゆきません。学生各自も図書を乱さないようご協力下さい。

閲覧課長—いろいろ出されました細かいご意見に対しましてもよく検討して善処するようにいたします。

図書館長に出していただいた菓子をつまみながらの懇談会は、出席者は少数であつたが、実に熱心に意見が述べられ、はじめての懇談会としてはまずは成功ということで5時散会した。

このような催しは今回を契機として今後とも機会をみて続ける予定であり、よりよい図書館づくりのため、もっと多くの学生が参加し、意見を述べられるよう切望する。

注・学生より出された意見のうち、閲覧室の照明については早速蛍光灯をとりかえるよう準備中です。また書庫から出した図書の返納も、5時以後は開架室のカウンターに返却すればよいようにしました。その他の件についても検討中です。

## 資料紹介

## ○ Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur (世界雑誌論文目録)

一般に I. B. Z. と略称されるこの目録は ABC の 3 部に分け、各々その発生の歴史を異にしている。

A は 1896 年 Dietrich によって第 1 巻が出版された。書名は Bibliographie der deutschen Zeitschriftenliteratur であって、その名の通りドイツ語雑誌論文目録であった。すなわちドイツ語の雑誌に所載の論文を件名の ABC 順に排列し、各論文にはその所載誌名、巻、号、頁数を記載している。ただし雑誌名は略名またはゴチ体のアラビア数字で表示し、この誌名の略名または数字の対照表を巻頭に掲載し、巻末には著者索引が付してある。現在は半年刊であるが初期には年刊であった。現在ではドイツ語雑誌 3,600 種、新聞 46 種をカバーしている。既刊 v. 1 (1896) — 106 (1954)。なお補遺篇として v. 1-20 ; 1861—1898 が追加されている。

利用者はまず論文の発表年代を考慮しながら論文の件名または書名の特徴語によって、その論文を検索するか、巻末の著者名索引によって件名に遡って、その論文の所載誌名とその巻号頁数を知ることができる。

B は Bibliographie der fremdsprachigen Zeitschriftenliteratur と題し、ドイツ語以外の国語の雑誌の論文目録である。A に遅れること 15 年、1911 年に第 1 巻を刊行して現在におよんでいる。30 カ国、20 カ国語の雑誌 3,200 種をカバーしている。既刊 v. 1 (1911) — 22 (1925), N. F. v. 1 (1925) — 25 (1943)

C は Bibliographie der Rezensionen と題している通り、書評の目録である。1900 年に A の Suppl. として編纂された。すなわち A は雑誌論文目録であるが、C は単行本目録である。ただし、一般の図書目録と異り、その図書に対する書評の出典を明示している。著者名の ABC 順排列で、その著者の著書名、出版地、出版者、出版年を簡略に記述し、次にその図書に対する書評が収載されている新聞・雑誌名と、その巻、号、頁数を表示している。初期 (1900—11) にはドイツ図書のみであったが、1912 年以後は外国図書も取扱っていることは前記の A と B に対応している。既刊 v. 1 (1900) — 77 (1943)

上記 IBZ (A, B, C) は戦後の世界的需要にこたえて、ニュー・ヨークのクラウス社よりバックナンバーの複製本が刊行された機会に、本館も 1 セットを揃えて参考図書の充実に資している。

## ○ 国立国会図書館編 帝国図書館・国立図書館和漢図書分類目録 昭和 16 年 1 月—24 年 3 月 昭和 39 1144p (国立国会図書館蔵書目録)

この目録は帝国図書館、国立図書館で昭和 16 年 1 月から昭和 24 年 3 月までに増加した和漢図書のうち、古書を除いた目録で、32,890 標目を収めている。分類は日本十進分類表により、簡単な主題索引もつけている。日本のもっとも激動的な時代に刊行された図書を示す目録としても興味深い。

## ○ 国立国会図書館編 国立国会図書館蔵書目録洋書篇 I 昭和 23—33 年 昭和 38 1374p

この目録は、昭和 23 年 4 月国立国会図書館が創立されてから、昭和 33 年 12 月までの間に整理を終えた洋書の目録である。収録された範囲は一般著作・総記、哲学・宗教および社会科学部門の図書 22,959 点を収めている。詳細な目次と簡単な主題索引がある。

## ○ 国立国会図書館編 国立国会図書館所蔵日本関係欧文図書目録 昭和 38 306,74p

この目録は、諸官庁および学術諸機関の調査報告、日本の伝統芸術の紹介、日本の文学作品の翻訳などの日本紹介書および欧米人の著わした日本研究書、日本旅行記、見聞録など各部門にわたって約 2,300 点を収録している。収録の範囲は、昭和 23 年 4 月から 37 年 12 月末までに、同館の所蔵となった図書のうちからえられたものであるから、決

して包括的な目録ではない。巻末に目次、主題索引および著者索引がある。

- 国立国会図書館編 **各国原子力関係機関発行資料目録** 昭和38年3月末現在 第2巻 昭和39 341p

この目録は同館参考書誌部科学技術課において、1963年3月末日までに収集した原子力資料のうち、AEC リポートを除く、各国原子力関係機関のリポート8,421件を収録したものである。

- 神奈川県立金沢文庫編 **金沢文庫古文書** (第1—12輯) 索引 昭和39 354p

この索引はさきに刊行された金沢文庫古文書のうち、第1輯から12輯までの索引である。時代的には鎌倉時代、室町時代に属する文書の索引である。巻末に18頁にわたって古文書追加篇が添えられている。

- 小倉豊文編 **広島大学寄託加計隅屋文庫目録** 第1巻 昭和38 294p

加計隅屋文庫とは、広島県山県郡加計町の、通称加計隅屋こと(加計家)に代々伝わる古文書・古記録および新古の典籍あわせて数万点に達する文庫である。この目録第1巻は文書之部の鉄山関係資料の目録である。

- 前橋市立図書館編 **萩原朔太郎書誌** 昭和39年3月末現在 昭和39 137, 10p

この書誌は詩人萩原朔太郎の書いたものおよび朔太郎について書かれたものを、昭和39年3月末現在で網羅的に集めたものである。その点では一般の個人書誌とかわりないが、この書誌にはさらに別編として、自筆ノート・写真・遺蔵書などにかく朔太郎に関係あるものはすべて拾われている。

## ルーマニアからの親善図書 300 冊余

一駐日大使から贈られる一

学術図書の交換を通じて親善をはかろうと、8月8日午前10時、ルーマニアのイオン・オブラドビッチ駐日大使とイオン・ニコラエ文化担当書記官が本学を訪れ、300点余の図書をおくられた。

これは昨年の8月15日、イオン・ニコラエ書記官と日ル友好協会鈴木四郎理事が京大を訪れたさいの、平沢前総長との間の話合いに基づいて、このたびわざわざ駐日大使が持参されたものである。

当日は折悪しく奥田総長は出張中であつたため、総長代理として藤本工学部長、それに堀江図書館長およびその他の関係者が出席して、総長室で贈呈式を行った。

贈呈を受けたルーマニア図書は、単行本201冊、雑誌105冊で、あわせて306冊。人文・社会科学から自然科学にわたり、ルーマニアにおける最新の学術文化の成果を示すものと言えよう。

図書館ではこれらの図書をひろく展示するため、9月29、30の両日にルーマニア図書展を開催する予定である。



(京都新聞社提供)

## 図書整理業務の飛躍的能率化

ゼロックスによるカード複製始まる

京都大学における年々の図書増加量は、別表にみるように、その伸びが著しい。これらの図書の多くは本館で目録作業が行われ、部局図書室に目録カードとともに返却される。しかし図書の増加にもかかわらず、これを整理するための人員の増加は実現しないので、現状のままでは必

京都大学における年々の図書増加量は、別表にみるように、その伸びが著しい。これらの図書の多くは本



然的に図書の整理業務が渋滞し、教官・学生に不便をかけることになる。

このような問題を打開するために考えられることのひとつは、全学の図書整理業務組織を根本的に改変することである。しかしこれはなかなか困難であり、かつ焦眉の急の間に合わない。それで第2に考えられたのが、現在の組織のもとで、できる限りの能率化、とくに機械化による能率化である。

図書整理業務上の問題点のうちもっとも大きいのは、目録カードの複製である。原稿カードをそのままオリジナルにして、必要枚数のカードが迅速に複製できる方法について、前年度以来いろいろと検討してきたが、最終的に採用にふみ切ったのがゼロックス 914 電子複写機である。

しかし、ゼロックス 914 はもともと、カード用紙のような部厚い紙に複写することを目的としていない。それで、この便利な複写機でなんとかカードの複製ができないかということで、いろいろ検討のすえ、複製にやっと自信を持つことができるようになった。そこで9月1日から希望部に、ゼロックスによるカード目録を配布することになった。ゼロックスの活動開始により、本学における図書整理業務は、いちだんの飛躍が期待されている。

年 度	35	36	37	38
年間増加冊数	50,714	57,292	68,772	69,184

ご 利 用 下 さ い

## 文 献 複 写 室

付属図書館の地階にある文献複写室では、学術研究を目的とする複写であれば、学内各部署の図書室所蔵の文献はもとより、他大学への複写申込みも受付けております。申込方法は、当室備付けの申込書に記入していただければ、原本所在場所を調査し、複写いたします。

現在行っております複写は、ネガフィルムに撮り、ポジフィルム、あるいは、引伸印画にする方法です。もちろんネガフィルムだけでもお渡しいたしますし、ネガフィルムを持参されれば、それをポジフィルム、または印画焼付もいたします。引伸印画のサイズは、キャビネ判、A5判、B5判、A4判の4種類あり、ご希望のサイズにいたします。

現物の送付を希望される場合には、複写料金に送料をプラスしていただければ、お送りいたします。支払は現物と引きかえて、現金または校費（校費は移算による）でしていただきます。複写実費額は次頁別表に示す通りです。

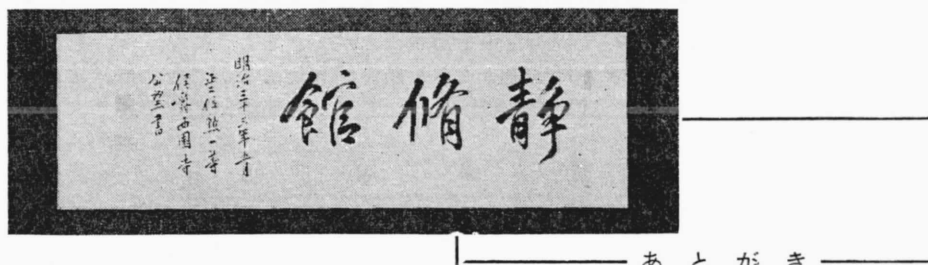
学外からのお申込みは、所属機関（大学・研究所の図書館）を通して、文書で当文献複写室宛お申込み下されば、複写して送付いたします。

もう一つ現在行っております複写は、いわゆる青写真で、学内の講師以上の方の申込みに応じており、講義用のテキストとして使用されるものに限ります。これは最初の申込みは、5部以上、その後、追加される場合は、1部から受付けます。

受付時間は 月曜日・金曜日・午前9時より午後5時まで（但し12時より1時迄休憩）  
土曜日・午前9時より正午まで。



マイ ク ロ フ ィ ル ム	ネガフィルム	1 コマにつき ただし撮影資料持参の場合	10円 8 円
	リーダー・トレーラー	1 件につき ただし郵送しない場合は希望者のみにつける	50円
	ポジフィルム	最初の 1 m 以後 1 mにつき 1 m未満の場合は 1 mとして計算する	100円 60円
	特殊撮影料	複写上特別に手間を要するもの(たとえば和漢の古書) はネガフィルム撮影料金に 1 コマ 2 円を加算する	
引 伸	キ ャ ビ ネ B 5	12円 A 5 30円 A 4	20円 40円
テキスト	1 枚 (ただし 5 部以上に限る。学外は取扱わず)		4 円



京都大学付属図書館静修第 1 号をおとどけします。

図書館報と称するものはかつて昭和 15 年に刊行されたことがあります。「京都大学付属図書館六十年史」によれば、「昭和 15 年 7 月京都帝国大学付属図書館報第 1 号を刊行し、本館新着図書の速報を主とし、閲覧統計・報告等を載せ、学内各部署に配布した。この館報は謄写刷で、7 月 15 日第 1 号を発行し、学内各方面からその発展を期待されていたが、支那事変による物資欠乏等の事情もあって、同年 10 月わずかに第 5 号をもって中止された。」(同書 234 頁)とあります。

今回の館報は、かつて短命に終わった館報のたんなる復活ではありません。堀江館長の「創刊のことば」にもありますように、図書館と利用者との相互のコミュニケーションをよくすることに、もっとも大きなねらいがあります。この刊行目的がどこまで実現されるかは、ひとえにわれわれ編集委員の責任ではありますが、無力でありますため、ひろく各方面のご支援を切にお願いいたします。

ところで館報の名称として「静修」という言葉をえらびました。若い館員のなかには、もっと生きのいい名前をという意見もありましたが、本館には「静修館」という館名がありますので、結局それをそのまま採用することにいたしました。

明治 32 年末に本館が設置されたとき、当時の文相の書記官であった中川小十郎氏が、文相西園寺公望公に館名を委嘱したところ、「静修館」と揮毫して贈られたもので、その語の意味は、文字通

り静かに修めることであります。出典は小学巻 5 外篇嘉言第 5 にあり、諸葛孔明の論言で「諸葛武侯戒子書曰、君子之行、静以修身、儉以養德、非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠」という文章に基づいています。

上に掲げた写真が西園寺公の筆になる静修館の扁額で、今も本館 2 階の大閲覧室に掲げられています。この館報の「静修」という文字は、この扁額からとりました。

なお館報の巻頭を飾っている写真版は、「雲」と題する斎藤素戔氏のレリーフで、本館玄関に掲げられています。全く同じものが本部の建物の正面玄関にもありますが、本館のものが原型です。

このように「静修」の巻頭は、ゆかりの深いものばかりで飾ることになりましたが、本文の方も、吉川先生の記事を掲載できましたことを喜んでおります。お忙しいなかをわざわざご執筆下さいました先生にあつくお礼申しあげます。

館報の編集には今後つぎの者があたることになりました。部局図書室からも数名の方に委員として参加していただきましたが、快く委員を出して下さいました部局の関係の方々のご協力に感謝いたします。

岩猿敏生(委員長)、島田広二(本館)  
広庭基介(本館)、内藤昭子(本館)  
大沢紀子(本館)、高野正夫(本館)  
古原雅夫(農学部)、金井孝(経済学部)  
岩佐節子(薬学部)、堀田繁雄(教養部)